

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

No.21 designated research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/876

様式第5号 (第7条関係)

令和4年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理 番号	# (20-1) 奨励・指定	研究代表 者氏名	鎌田 ゆき	職位	助教
研究 組 織	氏 名		職 位	役割分担	
	研究代表者：鎌田 ゆき		助教	研究統括，データ収集，分析，成 果報告 (学会発表)	
	研究分担者：藤野 成美 (佐賀大学)		教授	分析，研究過程について助言	
<p>研究課題名</p> <p>児童・思春期の子どもを対象とした精神科訪問看護における看護実践モデルの開発に向けた基礎的研究 ―看護師へのインタビュー調査による看護実践の明確化―</p>					
<p>研究実績の概要</p> <p>(抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。)</p> <p>【研究目的】</p> <p>児童・思春期の精神障がい者を対象とした訪問看護実践モデルの開発に向けて、訪問看護の実践内容について明確化を図る。</p> <p>【研究の意義】</p> <p>児童・思春期の精神障がい者が主体的に生活をする上でニーズの充足をめざした質の高い看護実践につながることを期待できる。</p> <p>【研究方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 研究デザイン：質的記述的研究 対 象：児童・思春期の精神障がい者を対象とした訪問看護の経験がある看護職 データ収集方法：半構造的面接によるインタビュー調査 (対面) データ収集期間：2021年3月～11月 調査内容：児童・思春期の精神障がい者を対象とした訪問看護における実践内容 分析方法：すべてのデータをコード化し、その中から児童・思春期の精神障がい者を対象とした訪問看護の実践に関する記述を抽出して、サブカテゴリーおよびカテゴリーを生成する。 結 果： <ol style="list-style-type: none"> 対象者の属性 <ol style="list-style-type: none"> 職種・性別：看護師7名 (男性4名、女性3名) 年 齢：平均42歳 (27～49歳) 看護師経験年数：平均20年 (5～27年) 精神科訪問看護の看護師経験年数：平均11年 (4～20年) 					

<p>⑤ 児童・思春期の精神障がい者を対象とした訪問看護の経験年数：平均 6 年 (1～18 年)</p> <p>⑥ 所 属：A 県および B 県内の訪問看護ステーション 6 箇所</p> <p>2) 面接時間</p> <p>平均 48 分間 (37～59 分間)</p> <p>3) 分析結果</p> <p>児童・思春期の精神障がい者を対象とした訪問看護の実践内容は、4 つのコアカテゴリー、33 のカテゴリー、51 のサブカテゴリー、201 のコードで構成された。コアカテゴリーは、【子どもと看護師の間に安定したアタッチメントを形成する】【問題行動でしか表現できない子どもに向き合う】【子どもが主体的に行動できる動機づけを図る】【不安定な家族関係に支援チームの一員として働きかける】であった。</p> <p>8. 考察：</p> <p>児童・思春期の精神障がい者の訪問看護においては、問題行動にどのようなメッセージが込められているのかを見極め、子どもの生きづらさに寄り添うとともに、強み (ストレングス) に着目し、子どもの将来を見据えた発達促進的な支援をすることが求められる。看護師は、これまで互いに巻き込んできた不安定な家族関係に介入し、社会とのつながりを作ることで、子どもと家族の解決努力を支える視点をもつことが重要である。</p>
<p>研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)</p>
<p>日本在宅看護学会誌 投稿時期：2022 年 12 月予定</p>

様式第5号 (第7条関係)

令和4年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理番号	# (20-2) 奨励・指定	研究代表者氏名	高瀬理恵子	職位	助教
研究組織	氏名		職位	役割分担	
	研究代表者：高瀬理恵子		助教		
	研究分担者：				
研究課題名 「ひきこもり当事者を抱える家族の葛藤に関する文献検討」					
研究実績の概要 (抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。)					
I. 背景 ひきこもり当事者の家族は、ひきこもり当事者への対応にかなり疲弊しており、家族支援によって家族の精神健康の破綻を防止することは重要である。しかし、ひきこもり当事者が医療に繋がるのが難しいことから、その家族自身も医療支援に繋がりにくく、家族に対して看護はどのような支援ができるのかについては、ほとんど議論されてこなかった。					
II. 目的 国内のひきこもり当事者の家族の体験に関する文献から、ひきこもり当事者を抱える家族はどのような葛藤を抱えているのかを明らかにし、看護への示唆を考察する。					
III. 方法 文献検討。医学中央雑誌 web 版を使用し、「ひきこもり AND 家族」で検索し、症例報告や事例、解説、抄録なしの文献、会議録を除いた 8 文献を対象とした。					
IV. 結果 引きこもり当事者を抱える家族の葛藤として、[子どもの状態がひきこもりであると認めることへの葛藤] [希求する支援が得られないことへの葛藤] [家族の問題として引き受けることへの葛藤] [普通への囚われを手放すことへの葛藤] [希望を失わず子どもの成熟を待つことへの葛藤] の 5 カテゴリーが明らかになった。					
V. 考察 ひきこもり当事者の家族は、葛藤解決のための方略として回避スタイルや支配スタイルをとる傾向があり、家族の精神的健康度は低いことが推測された。家族支援として、ひきこもり当事者への具体的な対応を学べる機会を作り提供していくことが必要と考える。					

研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)
日本赤十字看護学会への投稿を考え準備中である。

様式第5号 (第7条関係)

令和 4年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理番号	# (20-3) ○奨励・指定	研究代表者 氏名	松中 枝理子	職位	講師
研究組織	氏名		職 位	役割分担	
	研究代表者：松中 枝理子		講師	質問紙作成、インタビューガイドの作成、フィールドの確保、データ収集、解析、論文の執筆	
	研究分担者：宇都宮 真由子		助教	質問紙作成、インタビューガイドの作成、フィールドの確保、データ収集、解析	
	研究分担者：隈井 寛子		助教	質問紙作成、インタビューガイドの作成、データ収集、解析、論文の執筆	
	研究分担者：園田 希 (2022年4月～宝塚大学)		講師	質問紙作成、インタビューガイドの作成、データ収集、解析、論文の執筆、学会発表	
	研究分担者：橋本 真貴子 (2022年4月～山口大学)		助教	質問紙作成、インタビューガイドの作成、データ収集、解析	
	研究分担者：大重 育美 (2021年4月～長崎県立大学)		教授	質問紙作成、インタビューガイドの作成、データ収集、解析	
研究課題名					
COVID-19 流行下における 3 歳児の保護者の日常生活とメンタルヘルスへの影響要因に関する Mixed Method					
研究実績の概要					
目的					
COVID-19 流行下における幼児の保護者の育児支援の内容や方法を検討するために、量的研究 (研究 1) にて COVID-19 流行下における幼児の保護者の生活の満足感、日常生活の変化の程度、質的研究 (研究 2) にて COVID-19 流行下における幼児の保護者の日常生活の体験を明らかにすることを目的とした。					
方法					
研究デザインは、量的研究 (研究 1) と質的研究 (研究 2) のデータ収集、分析を並行して実施する並列的デザインの Mixed Method とした。対象者は A 県 B 市で 2 歳～6 歳の幼児を養育する父親と母親とし、調査時期は 2021 年 2 月～2021 年 5 月までとした。データ収集は、3 歳児健康診査会場と保育園・幼稚園 15 か所にて行った。					
研究 1 は、自記式質問紙を用いた量的記述研究とし、調査項目は、属性(年齢・子どもの数・経済状態・職業形態など)、日常生活の変化、新しい生活様式の実践、生活の満足度、メンタルヘルス、育児支援への希望とした。データは SPSS ver.25 にて基本統計量を算出し、自由記載は内容分析を行った。					

研究2は、半構造化面接を用いた質的記述的研究とし、調査項目は、COVID-19流行下で保護者が日常生活を送る中で感じた変化やその思い、ストレスを感じた場面とした。分析方法は質的記述的分析を行った。

日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号: 20-015、20-016)。

結果

研究1では、2154部の質問紙を配布し、286名(父親27名、母親259名)より回答を得た。父親のうち、生活の満足度で、満足と回答した者は6名(22.2%)、不満と回答した者は4名(14.8%)、どちらでもないと回答した者は17名(63.0%)であった。一方、母親で、満足と回答した者は47名(18.1%)、不満と回答した者は110名(42.5%)、どちらでもないと回答した者は102名(39.4%)であった。日常生活の変化については、テレビやスマートフォン等の視聴時間は、15名(55.6%)の父親、150名(57.9%)の母親が増加したと回答した。付き合いの時間は、22名(88.1%)の父親、225名(86.9%)の母親が減少したと回答した。

研究2では、分析対象者は21人(専業主婦9名、勤労者12名)で、すべて女性であった。専業主婦では660コードから68サブカテゴリーを抽出し、10カテゴリーを得た。勤労者では607コードから78サブカテゴリーを抽出し、13カテゴリーを得た。専業主婦で得た10カテゴリーは、勤労者でも同様の内容で共通のカテゴリーを得た。幼児の母親はCOVID-19が出現した1年後も【COVID-19に対する恐怖心】を継続して抱いているが、【思いもよらない価値観の変化】【新しい生活様式への順応】を感じていた。しかし、母親が順応に至る過程で、【他者との人間関係の希薄化】【既存の育児支援システムの弱体化】【意図しない家庭環境の変化】という今まで経験のない環境下で、【新しい生活様式を取り入れる際に生じた閉塞感や困難感】【不本意に変化した子どもの遊びと遊ぶ場所の減少】【子どもの感染予防対策の促進に対する困難感】に対処することを求められ、保護者が担うべき役割が増したことで、【育児の負担感の増大】を自覚していた。勤労者はこれらに加え、【仕事や職場の変化による負荷の増大】【職場の機能を維持させるための責任感】を抱き、【仕事と育児の両立への困難感の増大】も自覚していた。

考察

幼児を養育する親は、COVID-19による生活の変化で制限を感じ、特に、母親の生活の満足度は低下していた。さらに、父親・母親とも付き合いの時間が減少しており、他者との感染予防対策に対する価値観の違いを感じたことでも【他者との人間関係の希薄化】が生じていた。育児支援の提供者には、感染状況に応じた感染予防対策を継続しながら、保護者同士の交流が活発になるような支援の拡充、保護者が自身の感染予防対策の価値観によって支援を選択できるような整備が求められる。

結論

COVID-19と共存する中で、親たちが満足感を得て生活できるよう、そして、次世代を担う子どもたちがより安心し、豊かに成長・発達していくことができる環境を整備していく必要がある。

研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)

【論文】

- ・「新型コロナウイルス感染症流行下における幼児の保護者の日常生活の体験と対処行動【第1報】」(筆頭著者：松中枝理子、小児保健研究、令和4年4月投稿)
- ・「新型コロナウイルス感染症流行下で幼児を養育する親のストレスと対処行動，育児支援の実態と育児支援へのニーズ」(筆頭著者：園田希、日本赤十字看護学会、令和4年8月投稿)

【学会発表】

- ・「新型コロナウイルス感染症流行下で幼児を養育する父親・母親の日常生活の実態」(筆頭著者：園田希、第36回日本助産学会学術集会、示説、令和4年)
- ・「新型コロナウイルス感染症流行下で幼児を養育する親の生活の満足度と育児支援のニーズ」(筆頭著者：園田希、第69回日本小児保健協会学術集会、示説、令和4年)